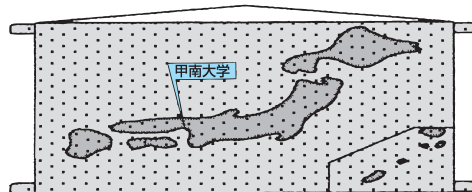


Zephyr

〈第87号〉

ゼフィール・にしかぜ


<https://www.konan-u.ac.jp/kile>

《特集＊研究と外国語》

★所長からのメッセージ：外国語文献を通じた研究と在外研究	高 龍秀	2
〔フランス語〕フランス語を通じて広がった私の研究領域	中村 典子	3
〔中国語〕外国語学習・研究	胡 金定	4
〔日本語〕日本語研究における英語との対照比較	谷守 正寛	5
〔国際理解〕研究と外国語 ～学生時代を振り返って～	小西 幸男	6
おすすめの本		7
国際言語文化センターからのご案内		8

甲南学園創設者

平生飢三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年2回刊行）

大学での専攻と外国語

大学での学部・学科の専攻分野と、外国語はどのように結びつくのでしょうか？ 英語圏に留学する場合は、どの学部・学科でも特に問題がないと思われませんが、自分の専攻する分野とは一見、関係がないような言語圏に留学したい場合は、指導教授の理解が必要です。また、フランスへの90日を超える留学では、長期学生ビザ（VLS-TS ou VLS-T étudiant）を取得する必要があるため、フランス政府留学局（Campus France）のサイトにて、「志望動機」をフランス語（または英語）で記載することが求められます。2000年以降でフランスへ留学した学生が多かったと記憶している学部・学科は、文学部の英語英米文学科と日本語日本文学科の学生です。前者の場合、英語圏ではなく、フランスへの留学を希望する理由を説明することが必要でした。例えば、「フランスの学生がどのように英文学を学んでいるのかに興味があるから」という志望動機を記載した学生がいました。日本語日本文学科の学生の場合は、日本語学科が設置されているリヨン第三大学への留学を希望し、「フランスの学生が、どのように日本語を学んでいるのかを現地で確認したい」という内容などを記載していました。このように、大学の専攻分野と自分の関心事を結びつけることで、さまざまな言語圏への留学が可能となり、世界が広がります。

（中村 典子）



外国語文献を通じた研究と在外研究

全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 高 龍秀

われわれ大学教員が研究を進める時に、外国語での文献から知見を得たり、国際的な学会発表などを通じて海外の研究者と交流したりする経験は非常に刺激を受ける機会です。日本で生まれ日本語を母語とする在日韓国人三世である筆者は、大学生となってから韓国語を学習し始めたが、大学院に入り韓国経済を研究テーマに決めました。大学院生として研究を進めるため韓国の著名な学者の韓国語書籍を購入し、何度も読みふけたことが懐かしい記憶です。特に、大学院博士課程在籍中の1990年に、所属していた大阪市立大学大学院と姉妹関係にある韓国のある大学院との合同シンポジウムがソウルで開かれる事となり、指導教授と共にわれわれ大学院生も参加できたことが非常に印象深い経験といえます。これが私にとって初めての韓国訪問であり、非常にドキドキした事を覚えています。韓国の大学でのシンポジウムでは、いままで研究書で知っていた著名な韓国の先生に多くお目にかかり、発表を直接聞く機会は感動的でした。同世代の韓国の大学院生が活発に質疑応答に参加する姿や懇親会での暖かなおもてなしなど、韓国でのシンポジウムを通じてその国の人情や文化に触れる体験をする事ができました。

この韓国でのシンポジウムの翌年に、甲南大学経済学部講師として着任する事となりました。大学に勤務する教員にとって半年程度の期間、本務校の授業や各種委員会など校務を離れて海外の大学で研究できる在外研究は非常にえがたい経験といえます。筆者は、2001年8月から約1年間、ハワイ大学マノア校で在外研究の機会をえて、同大学のCenter for Korean Studiesで研究しました。授業や雑用に追われる事がなく、ハワイ大学で自由にしたい研究を1年間できた経験は、今から考えると夢のような1年間でした。

ハワイ州では人口の半分以上を占めるような民族的マジョリティが存在しなく、多くのアジア各国、太平洋諸島など出身の人々が住み生活をしています。ハワイ大学には、歴史学、社会学、経済学など多くの分野で韓国出身の教員がいて、その1人のHagen Koo教授に公私にわたり大変お世話になりました。偶然にも私がハワイでの在外研究を始めた時期にKoo教授はこれまでの韓国の労働問題に関する研究テーマをまとめる作業をされており、ついに同年11月に著書を上梓されました。それがHagen Koo, *Korean Workers: The Culture and Politics of Class Formation*, Cornell University Press, 2001です。多くの韓国労働関係者とのインタビューを通じて、1960年代から30年間の急速な工業化により韓国の労働者がどのように階級としてのアイデンティティを確立してきたかについてダイナミックに分析した研究書です。この著書は2002年には韓国語にも翻訳されました。そしてKoo教授は同書が日本語にも翻訳されることを期待し、話し合いの結果、この翻訳作業を僭越ながら担当する事になりました。こうして、ハワイ大学での在外研究の最後の数か月は、Koo教授の英語の名著について、その韓国語への翻訳本も参考にしながら、日本語に翻訳する作業に没頭する事となりました。この日本語版は2004年3月に、ハーゲン・クー『韓国の労働者－階級形成における文化と政治－』（滝沢秀樹氏と共訳、御茶の水書房）として上梓される事となりました。いまでも、この本を手にとると、ハワイの美しいビーチで英語版と格闘したり、Koo教授とホノルルの韓国料理店で学術的な議論を楽しんだことが思い出されます。





フランス語を通じて広がった私の研究領域

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

学部時代、私は外国語学部のフランス語学科に在籍していました。3年次の時、ある新聞社のスカラシップの試験に運よく合格し、フランス留学のための渡航費と1年間の生活費を奨学金として出してもらえることになりました。そこで、4年次に日本の大学を1年間休学し、パリ第三大学に正式に編入しました。今なら、DELF-DALFなどの語学レベルを証明するフランス政府公認の試験がありますが、昔はそうしたものがなく、フランス大使館の指示に従って、東京で編入試験を受けました。試験内容は、長いフランス語の文章をフランス語でレジュメ(résumé)することでした。編入試験に合格した後、憧れのパリに9月に到着しましたが、フランス人の話す早いフランス語があまり聞き取れず、特に授業の内容はよく理解できませんでした。当時、パワーポイントなどは存在せず、ハンドアウトも提供されないばかりか、先生たちは黒板も使わず、ひたすら口頭で講義するため、自分でノートを取るしかありません。しかし、聞き取れない箇所が沢山ありました。演劇史の授業で近くにいたアニー Annieさんという女子学生が、困っている外国人学生の私を見るに見かねてか、自分のノートにカーボン紙を挟んで、ノートの写しを毎回、私にくれました。そのおかげで、その授業の単位を取ることができただけでなく、フランス人独特の筆記体を読むことができるようになりました。

大学院にてフランス文学(20世紀フランス演劇)を専攻した私にとって、フランス語の文献を読むのは日課でしたが、日常的にフランス語を聞いたり、話したりする機会はほとんどありませんでした。当時、インターネットもなく、フランス語を聞くには、NHKのBS放送で**France 2**のニュースを聞くか、フランス映画のビデオを借りてフランス語のやりとりを聞く以外の手段はありませんでした。しかし、思い切って、海外の学会に参加するようになると、フランス語で発表を聞き、議論する機会が少しずつ増えました。また、研究上の仲間ができただけでなく、関連テーマの別の学会にも誘われるようになりました。

※

※

※

私の研究テーマについては、『ゼフィール・にしかぜ』第81号(2022年No.1)に書いたことがあります。劇作家ジャン・ジロドゥ Jean GIRAUDOUX (1882-1944)をはじめ、**多文化共生、複言語主義、複文化主義**などに興味を持っています。こうした研究テーマに関連する海外の学会に頻繁に出かけ、口頭発表したり、研究仲間と議論できたことで、多くの国に研究仲間ができました。

さて、兵庫県の推進する **HUMAP (Hyogo University Mobility in Asia and the Pacific: 兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク)** というネットワークのひとつに、研究者間の共同研究を推進する「学術国際交流」制度の **HORN 事業** というのがあります。この事業を活用して、知り合いの3人の著名な研究者をそれぞれ1か月間、本学に招聘することができました(2006年、2010年、2017年)。そして、その都度、学生・社会人の方々向けに「多文化共生」に関する国際シンポジウムを開催しました。

フランス語圏以外で開催された学会で、最近参加したのは、2019年9月のモンゴル国立大学での「**アジア太平洋地域におけるフランス語教育：伝統と動向**」(L'Enseignement du français en Asie-Pacifique : Traditions et tendances) でした。欧米からもアジアからもフランス語教育関係者が多く参加していて非常に有意義でした。

自分が研究しているテーマに関係がある海外の学会や研究会に積極的に参加することにより、研究者間の交流が盛んになり、研究領域も広がりました。



モンゴル国立大学での学会(2019)発表の様子



外国語学習・研究

国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

外国語学習がもたらすもの

グローバル化された現代の世界において、外国語学習の意味は大きく変わっています。外国の先進技術を吸収するための道具としてのみならず、世界の人々とのコミュニケーションを通して、外国語で自国の文化や技術を発信することや、世界において一緒にさまざまな問題を解決していく必要が生じています。

異文化交流では、他国の人々とコミュニケーションを図らなければならないため、外国語を話す機会が増えます。外国人と会話をしてネイティブな言葉を耳にすることで、多くのことを学べるはずです。

他文化の人々とお互いを深く理解し合い、異文化交流を積極的におこなうことで、新しい気付きや価値観が生まれ、豊かな人生を歩めるかもしれません。外国人と交流したり他国の文化を学んだりすることは、自分たちと違う文化が存在することを認め、理解することが異文化交流において大切です。また、異文化交流は、これからの社会に必要なコミュニケーションでもあります。多くの企業が海外進出を果たすなか、ビジネスの場においても異文化への理解が強く求められているのです。

東洋の考え方、西洋の考え方

東洋と西洋の大きな違いの一つは、文化や宗教の違いです。東洋は仏教、道教、儒教などが主流です。一方、西洋はキリスト教が主な宗教です。また、言語や文字の違いもあります。東洋では漢字などの文字を使い、西洋ではラテン文字を使うことが一般的です。

西洋の哲学や宗教における伝統的な考え方の1つに、物事は環境から切り離して分析できる、というものがあります。

それに対し、中国の宗教や哲学では伝統的に、相互依存性や関係性が重視されてきました。古代の中国人は包括的な考え方を持ち、物事は複数の力が働く場のなかで起きると信じていました。たとえば「陰」と「陽」という言葉は、一見正反対のように見える力が相互依存関係にあることを表しています。

言葉の表現にも違いが見れます。中国人は大きなものから小さいものへと考えますが、西洋人は小さなものから大きなものへと考えます。たとえば住所を書く時、中国人は国、省、都市名、地区、街区、番地の順に書きますが、西洋人はその逆に書きます。名前も同じで、中国人は姓を先に言いますが、西洋人は反対です。日付も、中国では年、月、日の順です。

東洋と西洋の違いは多岐にわたりますが、文化や歴史、気候などの条件が影響していることがわかります。

視野を広げるための方法

外国語の勉強は視野が広がることにもなります。他国の文化的側面を理解するだけのことでなく、将来の選択肢を増やすことです。

視野を広げるには、ひとつの考えに固執せずに価値観を得られるような体験を重ねていくことが大切です。異文化交流から新しいアイデアの発想や困難な状況の打開策を生み出すことに役立ちます。日本しか知らなければ、日本の価値観の中でしか物事を考えることができないということです。世界を見ずに視野が狭くなっていると、日本の常識にうまく適応できなかった時には行き詰まってしまいます。外国語の勉強を通して、世界は広く、そこには本当に多様な生活や生き方、たくさんの選択肢が存在しており、夢が広がり、やりたいことも格段に増え、広い視野を持ち、多様性を得ることは、「人」を豊かにしてくれます。

自分の研究を外国語で説明する

新たな科学的知見を迅速にシェアするための共通言語は、必要だと思います。研究結果をより多くの人に届けることでしか科学は進歩しないので、研究結果を迅速に共有できるシステムは不可欠です。

新しい言語を身につけることで、未知なるものを知るだけでなく、それまで当たり前と思っていた自分たちの言語や文化を照らし返す視点をもつことができます。

すると、外国語で考えて決断を下した時はバイアスがかかりにくいということがわかります。また、考えられることが減るため、物事を大局的に捉えるようになり、結果として、無駄をできるだけ省き、多くを得ようとする傾向が高くなります。

違う言語で考えることは、選択肢から感情的な反応を無くします。悪影響についても立ち止まってじっくりと考えるようになるため、決断を下すにあたってフィルターのような働きをするのです。



日本語研究における英語との対照比較

国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

「研究と外国語」というお題で書くわけですが、日本語研究において外国語（英語）との比較は異なる言語に共通する側面や違いから気づくことがあり、時に有用で参考になることがあるので、そのいくつかを例証して述べます。筆者は構文を中心に言語というものをみていて英文構造を援用することもあるので、その具体的で specific なものから小さな言語事象かもしれませんが、一部例示し関心を持っていただければと思います。

英文法を学んだ時に強調構文というものがあったと思いますが、次のようなものです。

It is the shoji that Taro broke. (太郎が壊したのは障子だ。)

強調構文の元の文「Taro broke the shoji.」の shoji を強調するために抜き出して前置し残りの部分を後置させますが、後置部分は that で始まる連体修飾節で文頭の先行詞 It に係ります。強調されるのはこのような目的語以外にほかの成分でもかまいません。この手順から分裂文 (cleft sentence) と呼ばれます。さて問題は日本語の訳文です。次は疑似分裂文 (pseudo-cleft sentence) と言って構文の手順が異なります。

What Taro broke is the shoji. (太郎が壊したのは障子だ。)

おもしろいことに世に出ているどの英文法書（ネット情報も）を見ても分裂文と疑似分裂文の日本語訳が全く同じという実態があるのです。誰もこのことに何の疑問も持たずに受け入れていると推測できますが、考えてみるとおかしいことです。分裂文の場合に、日本語で「太郎が壊したのは～」と述べている数秒間に肝心の「障子」は強調されていませんが、英語ではまず強調したい「障子」を先に差し出します。疑似分裂文の場合は英語でもまず「What Taro broke...」と話を始めているので日本語と同じ調子で最後に「shoji」と提示しています。つまり日本語の表現は疑似分裂文の流れで展開しているので「障子」をまっ先に強調しているとは言えないわけです。にもかかわらず英文法ではどちらもまったく同じ日本語訳で説明されているところが文法のバグ (bug) ではないかと思われるほどにおかしな点だということになります。

ではなんと言ったらいいいでしょうか。筆者は執筆したことがあるので少しふれますが、これが上代から存在した係結び構文と同じではないかと思われれます。係結び構文では強調する語をまず前置させて残る部分を連体形で後置させるので、非常に似た構造になります。言語が違って強調したい語をまず先に言うのが普遍的なことでしょう。すなわち「障子ぞ、太郎の壊したる」となり強調構文の体裁を成します。なお係り結びは消滅していますが。

次にもう一つ、「雨が降れば行くかどうか分からない」という文について考えます。「雨が降れば」という条件句はどこに係るでしょうか。もし「行く」に係る構造であれば、分からないことが「[[雨が降れば行く]かどうか]」であるので、「雨が降れば行く」べきかということの問題にしていることになり、この話者は雨が降らなければ行かないんだがとでも言っていることになり通常の価値基準と逆の前提を含意することになってしまいます。では「雨が降れば」が「分からない」に係るとした場合はどうでしょうか。

If it rains, I don't know whether I will go or not.

これは通常の英語ですが、そうすると雨が降れば分からなくなる、つまり判断能力を失うことになるのでしょうか。理屈の上ではおかしいものです。そして、

I don't know whether I will go or not if it rains.

ではないらしいのです。理由は whether 節に複数の文が入れないらしいのですが、ネイティブの人に確認するとそれもいいかなという曖昧な返事でした。だめだと言う人も次のようには言えるかもしれないとのことです。いろいろと揺れる微妙な文法の歪みなのでしょう。

I don't know whether I will go, if it rains, or not.

紙幅の関係でこれ以上の言述はできませんが、外国語との対照比較で文法のバグらしきものや上代・中古の日本語の深みに気づくことがあるものです。



研究と外国語 ～学生時代を振り返って

国際言語文化センター兼任研究員 小西 幸男

今回のテーマ「研究と外国語」を「研究には外国語能力はなぜ必要なのか？」と読み解いて考えてみました。自分自身の経験に照らして、研究と外国語を考えれば、大学院生の時にショック療法のようにして学んだ研究に必要な外国語が思い浮かびます。私は日本の大学で法学を学び、社会人として働いた後、もっと世界を知りたくて海外の大学院へ進みました。

最初に、研究に大きく不安を感じたのは、語学の壁でした。イギリスの大学院へ進学したので、日常生活や一般的な社会の話題については、英語で話すことも読むこともできるように日本を出る前に準備をしていましたが、それは、最初はもしかしたら日本語に置き換えて考えることであったように思います。もちろん、授業も資料もすべて英語がベースになり、論文もエッセイもすべて英語で書き、自分の意見を述べる。ただその毎日の準備でへとへとになりながら、一学期間が過ぎたころ、フランス法のセミナーでは、EUを専攻していたこともあり、履修者も指導教官も私以外は全員がフランス語を自由に操れるという状況の中で、突然、「来週からはEUの判例は原語で読み、議論は英語もしくは表現によってはフランス語ですることにする」と指導教官が宣言して、大パニックになりました。今ではEU裁判所の判決文は多言語でほぼ同時に発行されるようになりましたが、当時はまずはフランス語、そして半年から1年後くらいにようやく英語に翻訳されるというペースでしたので、最新の判例からEUと加盟国の間でのような議論があるのか、また、各国への法令に反映されるときにどのような解釈があったのか、そうした議論を翻訳が出るのを待って置いては間に合わないということから、研究者ならそのくらいはできるはずという驚きの決断で使用するメインの言語を変えた授業がありました。毎週の読書量は何百頁にもわたる資料や文献に加え、定期的書きまとめなければならない論文で2週間ほどパニックを通り越し、恐怖を感じました。当時はまだEUになっておらず、EC法の専門の課程を学ぶことが珍しい頃でしたので、同じ専攻科に日本人がいるわけもなく、言語に不安を抱えた友人といえばキプロス政府から派遣されていたもう一人の学生くらいでした。二人で毎日のように図書館にこもって、半分泣きべそを書きながら、学んでいたところ、イギリス人のベルギーで育った同期生が助けてくれるようになって、少しした時に、「幸男は何語で考えてるの？」と聞かれて、「きっとフランス語—英語—そして日本語へと行ったり来たりして考えているんだと思う。」と答えました。そうしたら、彼女は、「その言葉と文化を考えて、自分がそこで生まれ育っていたとしたら、どんな風に物事をとらえるだろう？」って思考を真似てイメージにして考えた方がずっと早くて簡単だよ。」と教えてくれました。それがきっかけで、言葉やフレーズが醸し出す雰囲気も一緒に考えるようになったら、面白いくらいそれぞれの主張の違いが分かるようになって、加えて日本との違いが理解できるようになりました。文字にばかりとらわれていたところからフッと解放されて、誤差が完全になくなったわけではなかったけれど、文化の違いや環境の違いも言葉の中に埋め込まれていることに気づいて、とても楽になりました。

国際関係や多文化理解の研究には時として、翻訳された文献で知識を得るのではなく、原語に積極的に触れて双方理解を試みないと見えてこないものもあります。いくつもの言語を自在に操ることは難しくても、表現や論法に触れて違いや似ているところに気づくことで、より深い理解ができるようになります。外国語に興味を持ち、知ることは視野を広げることになり、多角的にものを見て理解することにつながります。グローバルという言葉が当たり前のように使われる今だからこそ、「研究」と難しく構える必要があるわけではなく、いろんなことを知って理解する楽しさを知るために「外国語」を学ぶことは、「なにか面白い宝物を毎日見つけられる」可能性を増やすことだととらえて、学生の中に少しでも身につけるとよいのではないかと自分の経験を振り返って思いました。



『新・韓国現代史』（文京洙）

岩波新書 2015 年

日本にとって最も近い隣国である韓国は、近年の K-POP や韓国映画・ドラマの爆発的な人気により日本の若者の心もわしづかみにする国とも言えそうです。この韓国の現代史について丁寧にまとめたのが本書です。日本による植民地、1945 年の植民地からの解放、南北の分断、朝鮮戦争、1960 年代以降の軍事政権とそれに対抗する民主化運動、同じく 1960 年代以降の目ざましい経済成長と 1997 年の経済破綻。主な項目だけ見ても、非常に波乱万丈の韓国現代史を本書は簡潔に分かりやすくまとめています。さらに、民主化運動の流れを受けた盧武鉉政権から、李明博政権・朴槿恵政権という保守政権に移り変わる中で激しい変化をとげる韓国社会の諸相を読みながら、K-POP や韓国映画の華やかな姿の背後に、非正規職雇用者が多く、定年年齢も日本より早期の場合が多いなど日本以上に不安定な若者の雇用環境、急速な高齢化社会化により深刻化する介護問題など今日の課題についても考えさせられる内容です。

また、グローバル時代の中で、日韓関係はこれからどうなるのか。従軍慰安婦問題や徴用工問題などの懸案を考えるヒントも見出すことができます。筆者の文京洙（ムン・ギョンス）氏は、長年立命館大学国際関係学部で教鞭をとられ、韓国や済州島に関する多くの著書を刊行している方で、韓国に関心のある方にお勧めの本といえます。（高 龍秀）

『ノブレス・オブリージュ イギリス上流階級』（新井潤美）

白水社

イギリスの ITV 放送が制作したドラマ『Downton Abby（ダウントン・アビー）』は、日本でも NHK で紹介されました。その中で展開する貴族社会の物語の中で展開される貴族の生活や社会的立場は、イギリス人にとっても、その暮らしぶりそのものは身近なものではありません。しかし、イギリスの上流階級が国の歴史を作り上げてきたことを考えると社会現象になった人気と強い関心が国内で起こったことは容易に理解できます。物語の中の貴族とその使用人たちの人間模様の中に貴族社会の在り方やマナー、社会観・倫理観といった一種独特の価値観が根底にあることに気づかされます。この本では、上流階級あるいは Nobility（ノビリティ）と呼ばれる階級とは社会的にどのような役割を果たすものであるかについて、「貴族の称号」の取得の方法から階級の在り方と財産管理、教育、現在のカントリー・ハウスと呼ばれる貴族の屋敷の管理と相続まで興味深い紹介が多くの逸話とともに紹介されています。

「ノブレス・オブリージュ」とは、この貴族の立場、すなわち、社会的に地位のあるものには、大きな義務と使命のことを意味しています。フランス語の Noblesse（高貴さ）と Oblige（義務を持つ）です。特権階級であるからこそ、社会に対して無私の行動を行うという不文律の社会的な義務を持つということです。これは法律のように実行しないと処罰の対象にはなるものではありませんが、地位と特権を持つ者としての行動や態度をとれなければ、社会的批判を受けたり、人格を問われたりするような社会的な圧力ともなっています。この価値観は社会に大切で、調和ある社会へ導くリーダーには必要なものです。日本にはこうした上流階級というものは実際に制度としては存在していませんが、高等教育を受け、社会で活躍する若い世代に、表面的な経済の豊かさや生活の贅沢といったものに惑わされず、自分が社会にどのように関わっていくかを自問する際に、役だつ一冊ではないかなと思いますので、紹介させていただきます。

（小西幸男）

国際言語文化センターからのご案内

言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会

国際言語文化センターでは、外国語・国際言語文化に関する調査・研究を行っており、年2回の全体研究会を開催しています。

※日程その他の詳細は甲南大学ホームページにて公開いたします。

国際言語文化センター講演会

学生・社会人の方々に国際交流や言語・文化についての理解を深めていただく機会を提供するため、年2回の講演会を開催しています。

※日程その他の詳細は甲南大学ホームページにて公開いたします。

生涯学習講座

甲南大学リカレント教育センターと連携した社会人講習会『言語講座』や公開講座など生涯学習を開催しています。

社会人講習会『言語講座』

〈前期〉

講座期間 4月～8月

募集期間 3月

(土曜日・全10回)

〈後期〉

講座期間 9月～2月

募集期間 7月～8月

※詳細は甲南大学リカレント教育センター HP [公開講座] を参照ください。



公開講座

お隣の県（鳥取など）なのに関西弁と訛りがなぜこうも違うのか？

日程：2024年8月31日（土）10：00～11：30

講師：全学共通教育センター 教授 谷守 正寛（国際言語文化センター兼任研究員）

人生100年時代の学びとは？豊かな人生設計を考える知恵

日程：2024年10月26日（土）10：00～11：30

講師：全学共通教育センター 准教授 小西 幸男（国際言語文化センター兼任研究員）

※詳細は甲南大学リカレント教育センター HP [公開講座] を参照ください。

